学校教育における野外活動の現状と環境教育の理念
—北海道と青森県の事例—

武田　泉*・後藤忠志**

Ⅰ．はじめに—研究動機・研究目標

今日，地球環境問題への注目で，改めて環境教育の重要性が叫ばれており，文部省や環境庁ではモデル校を指定するなどの動きがみられる。しかしながら，現代の学校教育では，中等教育(中学・高校）を中心に，受験や管理教育がマス・エデュケーションとして強化されている。つまり，中等教育の「通過儀礼」化・ワンパターン化・「新学力観」などの諸問題は，組織のメンバーとしての管理（いわゆる飼い馴らし）の強化によって，無関心・利己的な人格形成へと結び付き，学校教育の形骸化をも招いてしまっている。また，全般的に教科や知識を偏重するあまり，実物や実態を重視した環境教育は，一部の献身的な教師による試みを除くと，十分とは言えない。そのため，今日的な環境問題の解決に寄与しようとする主体的な方向性(〝Think Globally Act Locally〟；地球規模で考え，地域に根ざして行動する）の実践が最も期待されるべき，環境教育の理念に合致した教育が実施される素地は，いまだ十分とはいえない。

本研究では，自然への親しみなど環境教育の場として重要視されるべき，中等教育における野外での課外活動が，団体行動や集団訓練の側面の方が優先されているため形骸化が認められ，さらには自然への悪影響も懸念される事例の存在を紹介し，様々な背景を検討した。その上で，地域的な課題としての環境教育のあり方について問題提起と，地域課題として地域住民に自然保護活動への手掛かりを追求する。本稿では特に，自然との接触が大きくかつこれまで実施例が多い学校登山(学校行事として実施される団体登山）を中心に取り上げる。

Ⅱ．学校教育における課外・野外活動と宿泊研修

1）学校行事としての課外・野外活動の歴史的背景

学校教育における修学旅行などの野外での課外活動の起源は，どこに求められるだろうか。明治19年に高嶺秀夫（東京師範学校校長）がアメリカ留学で得た，ペスタロッチ流の「開発教育・実物教授」を紹介したことに始まるというのが通説である。高嶺は，「我国教育の景況(従来の学校における教授）が，教室内においての書籍器機標本模型等に拠る。実物すなわち山川原原野溪谷鉱山製造所及動植物等に就き実地目撃,兵式体操を演習」とし，東京師範学校で「長途遠足」を実施する（日本修学旅行協会，1993)。戦前の学校教育においては，こうした教室外での行事は，当時の軍国思想と密接に結び付いていたため，団体行動訓練・精神鍛錬の目的が何よりも優先されていた。また，当時の系譜を引く地域名門（エリート）校独自の伝統的名物行事は，現在でも地域の期待を担った偉大な行事として考えられている。例えば，北見北斗高における「強行遠足」等のように現存し，「伝統的名物行事」が縁で山梨県の高校との交流も話題となった事例もみられる。肉体的にかなりハードなはずのこうした行事も，経験した卒業生が概して良き想い出として認識されている点も興味深い。

他方，学校行事としての学校登山は，学校山岳部（クラブ）より先行して展開した。そもそも近代登山は，植物標本の採集など自然科学研究から始まり，後により困難さを求めるスポーツ登山へと変化していったが，精神鍛錬・訓練の場としての機能が重視されていたことは，文人・大町桂月が出雲中学教師時代に著した著作からも明らかで

＊北海道教育大学岩見沢校
＊＊北海道教育大学岩見沢校・研

ある。北海道の主峰である大雪山・旭岳への学校登山は，小泉秀雄の赴任前から庁立旭川中学で既に明治30年代から実施されていた（武田，1995）。

2）学校教育における課外活動・行事の実施形態と環境教育の理念

今日，環境教育の重要性が叫ばれているが，様々な試みがなされている。文部省（1993年）や環境庁の，環境教育に関する指針をはじめ，各都道府県教育委員会でも自然密接型の教育を重視している。また，野外における課外活動は，学習指導要領（高等学校）では，特別活動の一つである学校行事の中の，旅行・集団宿泊的行事として位置付

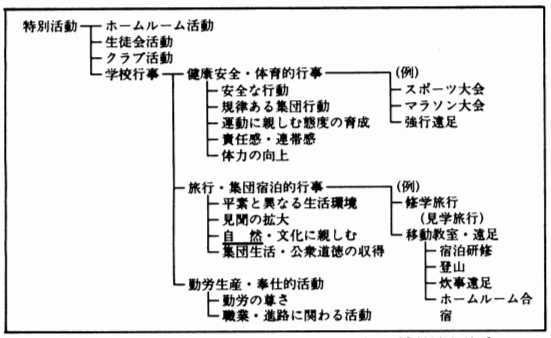


図1　高等学校学習指導要領における特別活動中の環境教育関連の内容

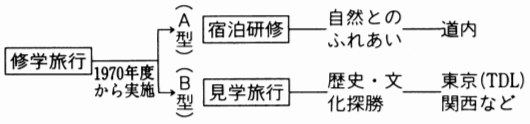


図2　北海道における道立高校の修学旅行制度の歴史

表1　公立高校(全日制)における宿泊研修の実施状況（平成5年度）

	実施対象学校数	実施校数	実施率(%)
北海道	273	273	100
青森県	86	10	10.6

北海道：制度化により100%近い実施率
青森県：制度化されずに任意に実施，実施率1割弱
（各教委資料より作成）

表2　宿泊研修における主な活動内容

内容／項目		野外活動					屋内スポーツ		他のスポーツ	レクリエーション	
		登山	ハイキング	オリエンテーリング	サイクリング	自然観察	水泳	フォークダンス		キャンドルサービス	レクリエーション
北海道	学校数（比率%）	126 (46.2)	53 (19.4)	25 (9.2)	9 (3.3)	38 (13.9)	1 (0.4)	12 (4.4)	103 (37.7)	55 (20.1)	86 (31.5)
青森県	学校数（比率%）	4 (40.0)		1 (10.0)							3 (30.0)

内容／項目		カルチャー										
		講師	映画	討論会	合唱	体験学習	郷土史研究	施設見学	奉仕活動	ホームルーム	記念植樹	その他
北海道	学校数（比率%）	44 (16.1)	58 (21.2)	18 (6.6)	21 (7.7)		4 (1.5)	110 (40.3)	108 (39.6)	54 (19.8)	0 (0.0)	138 (50.5)
青森県	学校数（比率%）					1 (10.0)			1 (10.0)			1 (10.0)

（各教委資料より作成）

けられている（図1）。その旅行・集団宿泊的行事における修学旅行や移動教室が，「平素と異なる生活環境，見聞の拡大，集団生活・公衆道徳の取得」と並んで，「自然・文化に親しむ」とされている[1]。

北海道の公立高校の場合，原則的に全員参加の，宿泊を伴う旅行的行事は歴史的経過もあって，基本的に本州方面とは異なった独自の制度のもと実施されてきた(図2)。北海道は遠隔地のため交通機関の限られていた時代においては，修学旅行は車中泊を含め1週間程度と長い日程が組まれていた。その後，交通機関の発達により日程の短縮が可能になったため，長い日程を2つに振り分け，野外活動を含む宿泊研修（1年次）と見学旅行（いわゆる修学旅行；2年次）が設定された。このため北海道では，宿泊研修の実施が制度的に担保されていて，北海道立高校（全日制）では宿泊研修が全ての高校で実施されている（図2）。

宿泊研修の実施時期では5～6月の新歓期と9月が多く，一部には2月にスキー合宿として行う学校もみられる。研修内容では，登山・ハイキングなどの野外活動，フォークダンスなどの屋内スポーツ，キャンドルサービスなどのレクリエーション，施設見学・奉仕活動・講話・討論会などのカルチャー活動と多種多様である(表2)。中でも，登山の実施率は道内で46.2%と半数近くに達していて，外見的にはこの登山が伝統的に野外活動における重要な位置を占めている。しかし実態としては，今日的な環境教育の視点から新たに積極的な試みを行うというよりは，むしろ団体訓練・集団性の醸成という旧来からの目的の方が強い。このことは，生徒が集団で「非日常体験」をすることで，クラスの連帯感や協調性を高めるということにウェイトを置いていることを示すものである。また，行き先も地理的に居住区との関連の深い地域を選択しているわけではなく，単に宿泊に適当な施設の有無により行き先が決められている。例えば，旭川圏を含めた大雪山山麓の高校の場合，身近な大雪山を避け，むしろ留萌の海岸など比較的距離の離れた箇所を選択している。

他方，北海道の公立中学校の修学旅行の場合，かつては層雲峡・阿寒湖など道東の景勝地をバスの車窓から駆け足で眺めて周遊する形態が中心だった。いわば国立公園を一般的で平板な形の観光

形態で，消極的に「利用」する事に終始していた。1980年代になると，道教委による通達の影響もあって，多くの学校が行き先を弘前・十和田湖など，北東北の歴史・文化観光地などの見学へと変化する。こうした選択は，内地へのあこがれ，連絡船乗船(現在は青函トンネル通過)，北海道にない「内地」の歴史・文化へのあこがれなどが，背景として挙げられる。近年では新たに，交通費が比較的廉価なフェリーを利用の上，洋上体験学習を行ったり(苫小牧市内の中学校)，ラムサール条約登録地の釧路湿原などの自然観察を重視した形態が取り入れられるなど，事前学習を含め授業教科と関連させ，主体的に取り組む学校も，少数ながら現れるようになった。

Ⅲ．北海道内の宿泊研修における学校登山の実態

1）公立青年・青少年の家を利用した学校登山

では，宿泊研修（本州方面での「移動教室」）で比較的多く利用される青年の家・少年自然の家とは，いかなる施設であろうか。この両者は，青年の集団研修・訓練のための「宿泊研修施設」として位置付けられていて，それぞれ国立・都道府県立・市町村立・組合立などがある。文部省直轄の国立施設の場合，青年の家が皇太子成婚記念，少年自然の家が学制百年記念という設立時の内部事情があり，また職員も国立の教育機関との人事交流が盛んであるなど，文部省の政策に直接裏打ちされている。国立青年・少年自然の家の多くは，土地は国有林から貸付され，全国的に自然の残存する自然公園地域へ立地する傾向が強い。この宿泊研修施設の利用は，施設自らが一方的に計画した主催行事と，申込による利用とに大別される。後者の申込方法では，利用を教育関係団体に限定しようとする意図が強く，煩雑でめんどうなものである[2)]。宿泊費は無料で，食費のみ必要という「究極の低廉リゾート」施設であるにもかかわらず，単なる「宿屋」として利用されることを極端に嫌っていて，一般のビジターや国立公園利用者を排除してきたのである。その反面，大人数の生徒を収容可能な宿泊施設が少ないため，大規模校では利用せざるを得ない状況もある。こうした場合も，10クラスの学校では食堂の収容力が足りず，２グループに分けて食事をとることが余儀なくされている。

2）国立「Ｄ青年の家」の利用実態

宿泊研修施設である国立Ｄ青年の家の場合，大雪山国立公園山麓の白金温泉（美瑛町）でも収容力は最大で，スポーツ施設・集会室・ホール・温水プール（温泉水利用）など各種の施設は充実している。しかし青年の家の利用実態は，学校（高校・中学が中心）の大間口校と社会教育行政関係者による，毎年恒例の同一団体による常連的利用が中心である。つまり，学校（高校・中学が中心）の大間口校の利用が卓越しており，新規の団体は利用していない。利用する学校側はこれらの施設について，①諸経費が安い，②物理的に企画・運営が楽，③生徒の健康管理・安全指導に一定の利点がある，などを利用しやすい条件に挙げている（末永，1992)。しかし意外にも，生徒のみならず現場教師の反応は，残念ながら驚くほど不人気で嫌われている。宿泊定員面で他に民間施設を選択可能な小規模校に至っては，絶対使いたくないとされる。さらには一般のビジターからの評判も芳しくない。こうした背景には，施設内での厳しい規則・規律や特徴的な行事（つどい）の存在のような，集団による団体訓練・鍛錬の色彩が強いことが考えられる。つまり国立青年・少年自然の家では，入退所時の「つどい」での精神講話や数々の「研修」などの機会をとらえて実施されるため，予定が立て込んでいる。また国旗掲揚と礼拝，「君が代」斉唱などの強制や，「10分前行動，５分前集合」に見られるような戦前の教育を彷彿とさせる復古・軍隊調の集団・団体行動の要素がきわめて強く，「個性抑圧・批判精神封じ込めのマスプロ教育の側面」（末永，1992)の存在は，甚だ時代錯誤的でさえある。こうした施設内における団体行動の実情は，高校作成の「しおり」の記述内容の分析からも，把握することが可能である。

Ａ高校の事例：「宿泊研修のしおり」

（Ａ高校は，札幌市内近郊の創立12周年になる，10クラスの大規模新設校である。この高校の１年生は，２学期はじめの９月に２泊３日の日程で実施している。）

＊朝夕のつどい
つどいに遅れることは許されない（5分前にクラスごとに二列に整列完了のこと）

意義～朝のつどい：さわやかな雰囲気の中で国旗・所旗及び校旗を掲揚し，集団の一員としての自覚をうながす／各自の健康観察や活動生活などについて連絡を密にし，団体行動の効果をあげる場とする

意義～夕べのつどい：落ち着いた雰囲気の中で国旗・所旗及び校旗を降納し，一日の生活を顧みる／全員が一堂に会して一日の反省を行い，生活のけじめをつけるとともに，相互の親睦を深める

＊研修4・奉仕活動～清掃要領
宿舎側廊下：①床にフロアーモップをかける（階段のゴミを念入りに），②床のしみ・窓の敷居を雑巾で拭く，③フロアーモップのゴミをきれいにとる

このように，行動の方法が集団管理の視点から事細かく規定されている。このため，後述のように一部の生徒は「刑務所の体験入所みたいだ」との感想を寄せているケースも見られた。

その一方この施設は，大雪山国立公園内という自然体験に適した環境にあるにもかかわらず，自然とは無関係な雨天時の諸施設（音楽ホール・プール・テニスコート等）の利用がむしろ重視される傾向がある。他方，ビジターセンターや自然解説員を活用した自然解説など，環境教育につながるようなプログラムは，青年の家作成の解説本（大雪青年の家，1992）以外には十分に開発されていない。プログラムとして登山を実施する場合，まず十勝岳が選ばれる。事故防止のため，施設側もトランシーバーを貸し出すなどの対策はかなり綿密に練られている。しかもながら，実際これらの山は景観の良さなど自然性に関して，一面見渡す限りの砂れき地で森林や高山植物に乏しく，登山の対象として適切な（おもしろい）山かどうかは疑問が残る。このため，必ずしも学校登山に適切とは言い難い。しかも大人数の登山では，気象・安全面から十勝岳頂上まで到達できないで，途中で引き返すことも少なくないという。さらには，バスで送迎して富良野岳へ登山することもあるが，一方で施設周辺で山麓の身近な森林散策をしないことにもなるという。

学校や青年の家側が考える自然とのふれあいや登山（全般的注意事項）については，A高校の「しおり」には以下のように記述されている。

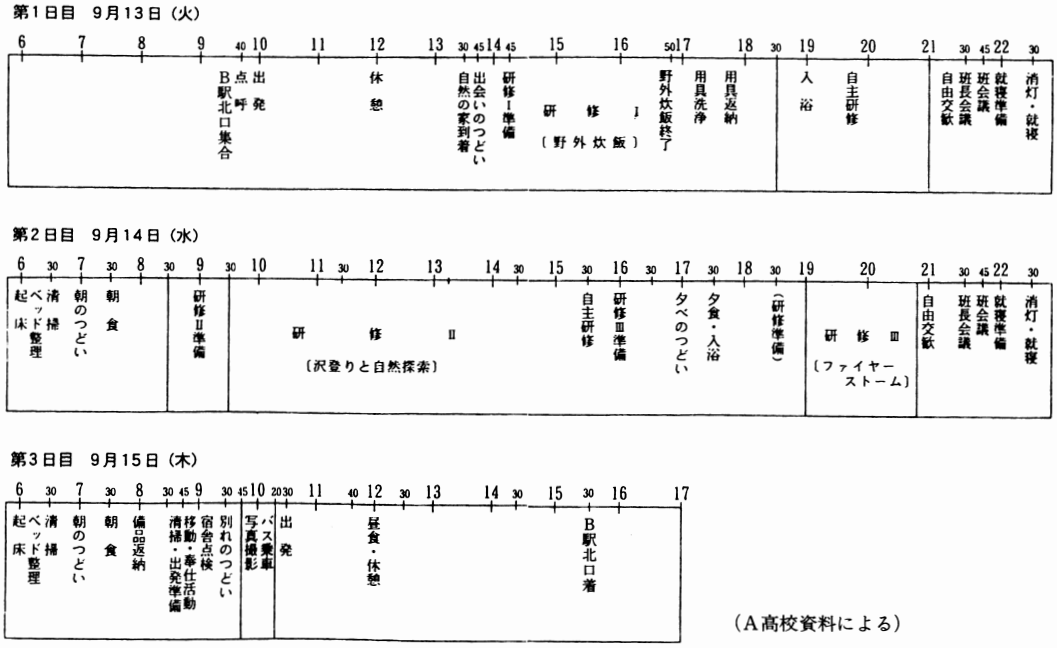
＊宿泊研修の意義とねらい：札幌という大都会での生活を離れ，日本の最も原始の大自然，大雪山十勝岳連峰のふところ深くにA高校1年生全員が集う。（中略）共同生活の体験を深め，友人同志の心のふれあい，生きることの素晴らしさを実感するために，規則正しく，思い出多い宿泊研修がここで行われる。この研修の目的は次の4点である。

1．連帯感を育て，今後の学校生活に資する
2．望ましい人間関係を学ぶ
3．自然とのふれ合いから「生きること」の意義を感得する（大雪山系の大自然の中で，自然の躍動と感動を体験し，豊かな情操を育てるとともに，人生の意義や生きがいを見出す機会にする。）
4．正しい生活習慣を学ぶ

＊体育的研修（登山）の注意事項：
①ゴミや空きカンは必ず持ち帰り，山に散らかさないで，青年の家まで持ってくること（②～⑥は略：集団行動・登山の一般的マナーについて記載）
⑦山小屋・指導標・高山植物を損なわないこと

以上の記述では，なぜ自然と触れ合うのかや，山でのゴミの持ち帰りや高山植物の保護がなぜ必要なのかを理解することはできない。こうした，登山に関係した人間活動によって生じる自然環境への影響（登山道の複線化・人為による裸地の拡大など），さらには自然保護の大切さを説くという観点はほとんど考慮されていない点が問題である。

では元来，こうした宿泊研究施設の立地で，自然条件はどの程度考慮されているのだろうか。少年自然の家については文部省社会教育局長通知[3]で（昭和48年第143号）で，「自然環境に恵まれていた場所に設置し，その施設・設備の形状及び配置は自然と調和するものであること」とされるのみで，青年の家では取り立てて条項はない。文部省の意図する「自然」とは，都会と対峙される環境であればよく，天然林であろうと人工林であろう



（A高校資料による）

図3　宿泊研修日程表

と関係ないようである。このため宿泊研究施設の立地は，付近にいかなる野外活動が可能な山や川があるかという自然の持つ資質・価値よりも，むしろ地元の積極的な誘致活動や用地取得の容易さなどの条件が優先されてきた形跡がある。このため，全国的にも国有地である国有林が立地対象として選定された箇所が，単にたまたま国立公園内であったというだけなのであろう。このため環境庁の作成する公園計画にはリンクしておらず，国立公園を有機的にフィールドとした環境教育活動には至っていないといえる。

3）学校登山の実態と生徒の反応

それでは，学校登山に対する実際の生徒の反応は，どのようなものだったのであろうか。D青年の家作成のガイドブックでは，次のような高校生の作文が掲載されている。

「登山などしたくないと思っていたし，あまり期待もしていなかったが，登ってみて，自然は何て雄大で素晴らしいのだろうと思った。それまでいじけていた私の心を素直な心に変えてくれたのです。私の不安なんてちっぽけなものだと教えてくれたのです。友と励ましあい，助けあいながら最後まで登り切ったときの感慨はひとしおでした。」

「頂上の岩に手を触れたとき，山は私に向かって，『山登りはいわば人生なんだ。一歩一歩頂上を目指して登るのがつらいように，人生も一日一日を歩み進むことはつらいことなんだ。でも，自分が苦しいときは皆だってそうなんだ。だから，自分もがんばることが大切だし，互いに助けあうことが大切なんだ。』ということを教えてくれたように感じました。」

しかし学校登山についての生徒の反応では，以上のような肯定的反応のみではない。ここでは，その他の学校の事例として，札幌市近郊の高校の事例を，生徒が書いた感想文から分析する。

＊A高校宿泊研修の場合

（「しおり」「感想文集」の誌面分析）

一行は札幌から貸し切りバスで出発し，国立D青年の家に宿泊，入退所時など朝夕2回の「つどい」をはじめ，1日目の夕方のファイアストーム（和のつどい），2日目の十勝岳登山（体育的行事，雨天時は球技大会）と夜の講堂での映画鑑賞（文化的行事），などが主なプログラムである。2日目は6時起床22時30分就寝と，高校生がこなすスケ

ジュールとしてはかなりハードである（図3）。

1年男子の感想例では「出発前はとても不安でした。（中略）宿舎も5組のある人が『刑務所の3日間，体験入所みたいだ』なんて言っていましたが，たしかにあまりいい所ではないと思いました」と施設自体への不安を訴えるものや，「朝から晩まで時間に追われてつかれた。やっと寝る時間がきて友達と夜中，小声で話していたら，まわりの人におこられる。規則正しい生活は，できるかもしれないが，友情は深まらないと思った」など実施意義への疑問を投げかけるものもあった。女子では「今回の宿泊学習が，今までにあった，修学旅行や宿泊学習の中で一番大変で疲れました」と研修内容への不満を示す例も見られた。

＊B学校宿泊研修の場合

（「しおり」「感想文集」の誌面分析）

B高校は，札幌市内近郊の創立12周年になる，10クラスの大規模新設高校である。この高校の1年生は，2学期はじめの9月に2泊3日の日程で実施している。札幌から貸切バスで出発し，国立C少年自然の家に宿泊。入退所時の「つどい」，1日目夕方の飯ごう炊飯，2日目の施設の裏山にあたる幌内丸山（標高900m程度）へハイキングと，夜のファイアストーム，などが主なプログラムである（表3）。

このうち，2日目のハイキングに対する生徒の感想文では，「とにかく，このハイキングが一番疲れた，めんどくさい出来事でした」という声や，「コースの後半はとてもつらかった。ハイキングの10.2kmの距離はとてもつらかった」との感想も聞かれた。また「みんな仕方がなさそうに登っていた。（中略）登る道がとても悪くクツがぬれ，山頂で食べた昼食もみんなのどを通らなく，水だけを飲んでいる人がいた。帰りの道（林道）は下りで広く楽だったので，上りもこの道だったらよかったと思った」などと現場の状況を生々しく訴える者もあった。

以上を含めた感想文を分析するため，感想文からキーワードを抽出し，肯定的評価と否定的評価とに分類すると，次のような点が指摘される（表3）。

肯定的評価としては，楽しい・やり遂げた・満足感など，集団登山による達成感・連帯感の醸成という側面が指摘されている。しかしそうした評価は，どちらかといえば自然とは無関係な面でなされていることが多い。一方否定的評価としては，疲れる・面倒・かったるい・めんどくさい・つまらないと，抽象的・表面的な体験でしか，自然の真価を判断している様子が理解される。このように，宿泊研修のプログラムの中での生徒のハイキングに対する評価は必ずしも高いわけではない。こうした学校登山における体験のおかげで，一面的な接触のみで否定的評価が下されてしまい，この生徒が将来にわたって登山が嫌いになったり，自然との接触が遠のいてしまう生徒が少なからず存在するというなら，実に残念なことである。

表3　宿泊研修（登山）感想文中の主要キーワード

評価類型	キーワード	分　　析
肯定的評価	楽しい やりとげた 満足感	自然とは無関係な面で評価 （活動の第一印象で登山・自然への評価が決まり易い）
否定的評価	疲れる 苦しい かったるい めんどうくさい つまらない	抽象的・表面的な体験によって自然の真価がわからずに否定的評価 （1：4の比で否定的評価多い）

（B高校資料より筆者ら作成）

このように宿泊研修における学校登山の実態は，大人数による一斉登山を基本としており，号令による一斉登山は，今日でも一般的な一斉授業方式とアナロジーがある。大人数の集団管理の背景には，事故防止という学校の管理責任が最優先されているという要因が指摘されよう[4]。

4）学校登山に対する当事者の見解（山岳部顧問の場合）

こうした学校登山の実態に対し，山を良く知る山岳部顧問教諭はどのように考えているのだろうか。ある顧問教諭（K氏）の場合，生徒（青少年）にとって山との出会い，とりわけ第一印象が最も大切だと指摘する。登山当日，快晴の晴天で展望が開けた場合などでは，良い思いをして，その生徒は再度山に登ってみたいと思うであろう。逆に，当日雨天で雨ガッパを忘れて服にしみて全身が雨でずぶ濡れになって寒さに震えたり，つらくきつい山登りでへたばったりするなど，その生徒にとって最悪の経験をすると，もう絶対に登りたくな

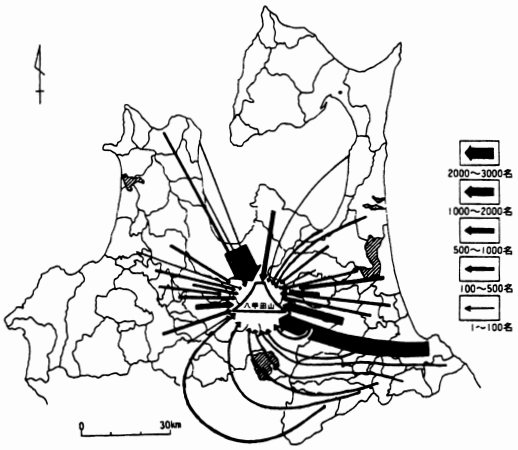


図4　北八甲田山地の学校登山吸引圏
（牧田・後藤，1990）

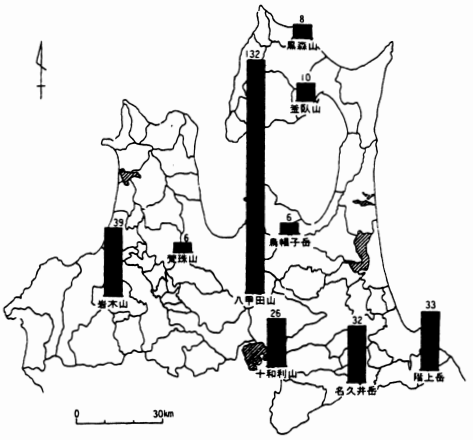


図5　青森県の主要な学校登山対象山地と対象する学校の数
（牧田・後藤，1970）

いと思ってしまうであろう。このように天候などの不可抗力や，生徒の主観に大きく左右されうる。また学校登山が，教育理念上も個人の存在・興味よりチームワーク・協調性を優先させる傾向が顕著であり，せっかくの自然への接触が活かされていない。「前の生徒のお尻を見ながら，号令によりしゃにむに登るだけでつまらなかった」という感想も生徒から聞かれる。すなわち，これまでの野外活動は「集団・団体行動訓練」が主目的（優先され）で，自然学習は副次的に取り扱われる傾向が強く，自然学習に関するプログラム・内容の形骸化が認められる。つまり，登山をプログラムとして選択しても，自然は単なる舞台装置と考えられているのである。

こうしたことから，むしろ大切なのは，幼いことから継続的に自然の良さを興味深く体験させ，自らが積極的に自然を好きになるようにすることである。このためには，中学・高校段階になってからではなく，幼児・小学校段階から自然との接触・自然の中での，良き思い出となる楽しい体験に親しませる必要がある。

5）登山する山の選択動向

では，道内の宿泊研修を含め学校登山では，どんな山が選択されているだろうか。まず先述の十勝岳・富良野岳が挙げられるが，それは山麓に大人数収容の宿泊施設であるD青年の家が存在するため，かなり登られているのである。これは山自体の持つ資質・価値よりも，実施上の基盤条件に左右されていることを示している。その他，札幌近郊の高校では宿泊研修で民間の宿泊施設を利用の上，ニセコ山系のイワオヌプリに登山したり，日帰りで天狗岳や空沼岳登山を行っている例もあるという。また道東の高校の場合では，羅臼岳や藻琴山などの比較的近く地元を代表する自然豊かな山に登っている。

逆に，大雪山のロープウェーのある黒岳・旭岳へ大人数の学校登山で登っている事例は，青森県の八甲田山における集中と比べ，それほど顕著ではない。学校登山の選択は，第一義には山麓の大人数収容の宿泊施設の存在に左右され，ロープウェーのキャパシティや交通の便，自然景観の良し悪しは，二次的な要因と考えられる。こうしたことから，登山者名簿等からも大雪山への登山者の多くはむしろ道外からであり，一般登山者・観光客の方がはるかに多いと考えられる。

Ⅳ．青森県での学校登山と自然環境への影響

1）青森県における学校登山の動向

青森県では，高校の宿泊研修（移動教室）は制度化されておらず，少数の学校が実施しているのみである。しかし，日帰り遠足を含めると登山はかなり広範に行われていて，アンケート調査から学校登山は90％近くが学校行事との位置付けで学

年・全校単位で実施され，参加人員も十数人から百人単位のものが約85％人も達していた（牧田・後藤，1990）。また，県中央部に位置する八甲田山へは，全県からの学校登山の対象となっていて，登山が集中していた。こうした集中現象は後述するような自然への悪影響を招いた（図４）。

２）学校登山による自然環境への悪影響の事例

登山など人間による自然への悪影響の代表例として，集団による登山道からのはみ出し歩行とその絶え間ない踏み付けに起因して，植物の枯死や裸地化・土壌侵食が指摘されている。このため八甲田山では，裸地化をくい止めるため，大規模な登山道改修・植生復元事業が実施された。全国的にも，登山の拡大による自然への悪影響が特に顕著な例としては，青森県の八甲田山の他，福島・山形両県にまたがる吾妻山(朝日新聞記事)，鳥取県の大山(一木一草運動：大山を守る会)，鹿児島県の屋久島（縄文杉枯死の危機）などでも報告されているが，全国的には断片的情報に留まっており，いまだ全貌は明らかではない。

八甲田山における学校登山（多人数による集団登山)が引き起こす植生破壊など自然への悪影響[5]が，マスコミ報道によって指摘された青森県の場合,指摘の翌年に多くの学校が登山を取りやめた。しかし，環境庁の要請を受けて，青森県教育委員会が学校登山実施の留意事項を各学校へ通達したのは，指摘後４年を経過してからと，対応は遅れた。

Ｖ．まとめと今後の課題

１）宿泊研修施設における改善へ向けての近年の動向

Ｄ青年の家では近年，個人利用を念頭に利用基準の規制緩和が進み，家族向け和室（畳敷）棟の設置，学校や大学サークル・社会教育団体やマスコミなどへも広範にＰＲするなど，改善も図られている。またスポーツ面に重点を置いてきた国立青年の家について，文部省が1994年に打ち出した方針は，文化活動もできるクリエイティブビレッジ（創造の村）に衣替えする構想が存在する。しかし，利用実態や研修内容を検討してみると，実際の活動・プログラム・内容は自然学習より集団訓練が優先しており形骸化[6]が見られる。さらには，相変わらず煩雑な手続によりビジターを排除しているなど，問題点が少なくない。これらの施設の稼働率は必ずしも良好ではないのであるから，規制緩和をさらに進め，もう少し柔軟に対応して欲しいものである。このため，せっかくの豊かな周囲の国立公園の自然環境を積極的に活用して，自然体験を重要視しようとする方向性は示されていない。文部省は，相変わらず国立青年の家を環境教育に生かし活用しようとする方向性を政策的に打ち出していないのである。さらに，宿泊研修施設（青年・少年自然の家）が国立公園利用施設としても位置付けられておらず，とりわけ環境教育に関しても，教育現場（課外・野外活動）と国立公園との接点が意外に希薄である。これは，背景として文部省と環境庁の間で，政策的な協調よりも対立競合関係や縦割り行政の弊害が強いのではなかろうか。

２）学校登山をいかに実地の環境教育に結び付けていくか

以上述べてきたように，環境教育実践の好個な場として期待されるべき，学校登山など野外における課外活動が，依然として自然・環境学習よりも集団団体訓練が優先されている。このため，自然学習に関するプログラム・内容が形骸化している場合が少なくない。これは全般的に，北海道のみならず全国的に修学旅行が，制度的にこれまでの慣習・惰性によって運営されている傾向がいまだ強く，教科教育と課外授業との融合など現代的視点から十分に検討されているとは言い難い。学校５日制による授業時間削減の一方で，これからの環境教育は，教科内における知識教育に偏重することなく，野外活動等においても現場や周囲の環境を活用した形として，より広範な視野でなされるべきであろう。また，事故防止など学校側の管理責任が問われる点もあり，大人数による集団管理教育・集団生活のマナーを学ぶ場がどの程度必要であるかも同時に検討されるべきである。つまり今後は，団体活動よりも個性を重視した人間形成に力点を置き，個人や小グループでの自然との関わり方を伝授した方が，より建設的ではないだろうか。

本研究における今後の課題としては，さらに大雪山への学校登山の実態と吸引圏がどのようになっているかと，実際の活動・プログラム・内容（自然学習と集団訓練との兼ね合い）の一層の検討が必要であろう。

本稿は，合同教育研究集会（北海道）環境教育分科会報告（1994年11月；札幌），及び日本地理学会一般研究発表（1995年３月；筑波）において報告した内容をもとに再構成したものである。取材に快く応じていただいた関係各位，並びに検閲して頂いた各位に対して，ここに謝辞を表したい。

注

1）学習指導要領（高等学校）によると，特別活動にはホームルーム活動・生徒会活動・クラブ活動・学校行事の４つに大別され，学校行事は，健康安全・体育行事と旅行・集団宿泊的行事，勤労生産・奉仕的活動の３つが挙げられている（図１）。

2）２人以上で申し込み，３週間前までに研修計画書を記入し，野外活動を行う場合は晴天時のサブ計画も立てる必要がある。少なくとも現地に２回以上電話する必要があり，この点でも一般のビジターにとっては，利用しづらい。

3）この通知の中で，少年自然の家の定義として，「自然に親しませ，自然の中で集団宿泊生活を通じてその情操や社会性を豊かにし，心身を鍛練し，もって健全な少年の育成を計ることを目的とする社会教育施設であること。」となっている。

4）上海列車事故高知地裁判決でも問題化した，注意義務・事前調査責任などが問題となり，事故防止が優先されるあまり，実施内容が形骸化する傾向も否定できない。

5）八甲田山における植生破壊など自然への悪影響と，学校登山との因果関係は，必ずしも明確ではない。しかし，地元テレビ局が取り上げるなど盛んにマスコミ報道されたため問題化したものである。

6）ここでは宿泊研修の形骸化を指摘したが，学校によっては地理担当者など教師側の努力により，かなり有意義な内容が実施されているとの指摘も得た。しかし，そうした成功事例は，必ずしも多いとは言えないのでないかと考えられる。また，D青年の家の対応が近年急速に変化し，教育現場や国民のニーズに応えるべく努力されていることについても，ここで強く指摘しておきたい。

文　献

牧田肇・後藤忠志(1990)：アンケート調査による青森県の「学校登山」の現状．特定研究「北八甲田山地の自然と開発」所収，145～175.

後藤忠志・牧田肇(1990)：北八甲田山地の自然破壊と登山．特定研究「北八甲田山地の自然と開発」所収，89～141.

武田泉(1995)：大雪山国立公園の自然保護を支えた四人の斬跡―太田廉太郎・小泉秀雄・大町桂月・林豊洲―．旭川研究〈昔と今〉７，39～62.

武田泉・後藤忠志(1994)：地域社会における環境教育の理念と実践の乖離―宿泊研修におけると十勝岳登山の実態（予察）―．合同教育研究集会（北海道）環境教育分科会報告.

後藤忠志・武田泉(1995)：学校教育における野外活動の現状と環境教育の理念－北海道と青森県の事例－．日本地理学会予稿集47，316～317.

日本修学旅行協会(1993)：「修学旅行の全て1993」，273p.

鈴木美和子・川村誠(1994)：自然公園におけるレクリェーション行動の研究－大山国立公園の登山行動－．鳥取大学演習林報告．83～114.

東京都西部公園緑地事務所(1991)：「秩父多摩国立公園奥多摩地域環境教育活動報告」．193p.

北海道保険環境部(1994)：「北海道環境学習推進指針」，36p.

大雪と石狩の自然を守る会(1994)：「カムイミンタラ－創立20周年号－」，192p.

大雪山自然観察講座を記録する会(1984-5)：「ウッドペッカー」１・２.

国立大雪青年の家(1992)「十勝岳連峰の自然と野外活動」，102p.

末永哲己(1992)：生徒を主体とした宿泊研修．教育研究全国集会（日教組第21次）報告資料，17p.